

IBM電子タイプライター85

副学長 昆 正 博

makon@cc.hirosaki-u.ac.jp

私が弘前大学に赴任したのは昭和53年3月でした。着任する前に何か必要なものがあれば用意しておくとの連絡があり、少し高価なものだがと思いながらお願いしたものが表題のIBM電子タイプライター85でした。当時としてはかなり高額なものだったと思います。

私のはじめて自分の専門である数学の論文を作ったのは1973年（昭和48年）であり、当時は英文タイプライターを用いて、慣れない手つきで1行ずつ打っていく作業を繰り返しました。慣れていくに従ってスピードは速くなりましたが、打ち間違えた箇所を修正する作業は大変でした。何しろ数学には複雑な記号が多いものですから、手書きにせざるをえない箇所などもあり、1編の論文を仕上げるには結構な時間を要したものです。雑誌に投稿したその論文が、無責任でのんきなレフリーにでも当たろうものなら、いい加減な修正を要求されて閉口したものです。

タイプライターを電動に変えたときには感激したのですが、すぐに記憶装置付きの修正等も容易な電子タイプライターが登場しました。この電子タイプライターを用いて1976年（昭和51年）、矢野健太郎先生と共著の約200ページの本をNew YorkのMarcel Dekker社から出版しました。1つの章をタイプし終えるたびに、矢野先生に郵送するかまたはお宅にお邪魔して確認していただきながら作業を進めました。

このような作業は、現在であれば、ワープロで原稿を作成し、電子メールでやりとりすることで簡単に出来たことでしょう。また、論文を雑誌に送ったり、修正原稿を送ることなどもすべて電子メールを用いる時代になっています。論文の検索に関しても、情報ネットワークの威力はすばらしいものがあります。最近では、原稿の送付やレフリーの結果報告に電子メールを用いるように先方から指定される場合も多くなっています。そのせいか、仕事の後に以前のような充実感はないような気がします。

ただ、実際に矢野先生のお宅にお邪魔して、お話を伺いながら身につけた多くのことは、現在の自分の数学以外の仕事も含めてすべてに役立っているような気がしています。情報化時代に成長した新人類とは感性や感覚も異なると思いますので、あまり競争しようとせずに（逆らわずにという方が正解か）協調の精神でいこうと思っています。彼らは、情報の洪水の中からどれが正確な情報かを感じ取る感性を自然に身につけているわけですから、それを自分でやろうとせずに楽をして教えてもらおう（うまく利用しよう）と思っているわけです。